
八不思議

桜原桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

八不思議

【Nコード】

N7358U

【作者名】

桜原桜

【あらすじ】

七不思議ゲーム……

それは不思議な現象をすべて見つけるゲームである。
最後までクリアしたら何でも願いが叶う……

第一章 四人

1

「起きて、起きて……起きろー。今日から夏休みだよ。」

はあ。また、うるさい妹のアミに起こされた。えーと、今何時だ。オレは時計の方を見た。……

「おいっ、四時って早すぎるだろっ。」

「だってだって、いっぱい遊びたいんだもん。」

オレは再び寝ようとしたけど、アミがオレの体の上のつかって目が完全に覚めてしまった。はあ、せっかくの夏休みなのにゆっくりさせてくれよな。だから、七時になるまで本や漫画を読んだりした。相変わらずアミはテンションが高い。オレの隣でずっとはしゃいでいる。オレは大きなため息をついた。

七時になった。オレは、目の下にくまをつくってアミと階段を下に降りる。下では、母が朝ご飯を作っていた。

「おはよう。」

アミが元気な声で言った。

「お、はよう……。」

元気ない声で挨拶したオレに母は、

「おはよう。二人とも今日から夏休みだから早いわね。ハルト、さては、アミに起こされたんでしょう。」

「はあ……。すっごい迷惑だよ。おかげで思う存分寝れなかったよ……。」

そんなオレに母は、

「まあまあ、早起きした分は遊べる時間が多くなるから今日は絶対良いことあるわよ。それより二人とも朝ご飯出来たから食べましょ。」

おれは、怒り、悲しみながら朝ご飯を食べた。

「そういえば、父さんは。」

「もう仕事言ったわよ。」

「相変わらず仕事早いな。」

「ハルト、夏休みの計画はしてる?。」

母が、訊く。

「はいはい。今からやりますよ。」

「今年こそ、夏休みの最後にまとめて宿題をしないでね。後で、大変なことになるわよ。」

「へいへい。」

やる気のない返事。すると、

「アミはね、もう計画たてたよ。偉いでしょ。」
母は、

「偉い。アミはハルトと大違いね。」

アミはオレの方を見て、上目線でフ……と、人をバカにしたような目で見える。

「こんのー。やるか。」

バンッ

母が食卓を叩いた。すると、少し微笑んだ顔で、

「やめなさい。」

こ、怖い……。

オレとアミは、

「す、すみません……。」

っと、謝った。

「あつ、やばっ、もうこんな時間。」

今、時計は八時になっていた。

おれは、ある用事を思い出して、自分の部屋へ戻り、着替えて財布をポケットにしまい、玄関の方へ向かった。

「ハルト、どうしたのよ。そんなに急いで……。」

母が首を傾げながら言う。

「今日、八時にダイスケ達と遊ぶ約束していたんだ。」

「じゃあ、アミも連れてってー。」

後ろからアミが両手を上下に振って俺に頼む。

「だめだ。おまえがいるとうるさくて、遊べなくなる。」

「えー。お願い。」

オレはきっぱり言った。

「だめ。」

「ケチッ。」

アミは舌打ちをした。

「じゃっ、行つて来ます。」

「行つてらっしゃい。」

母が手を振る。アミはまだ怒っている。

2

オレ達の住んでいる町は都心から離れているため比較的静かだ。

物騒というより平穏だ。ただ、近くに廃墟となったビルがある。そこは、不良のたまり場で有名で、みんな恐怖に脅え、不気味に思い近づこうと思うやつはあまりいない。

まさか、オレが後であの廃墟地に行くことになるとは……。

十分後

「おっそーい。ハルト。いつおまえは遅刻せずに済むんだ。」

送れたオレに、ビシツと言ったのは、とてもしっかり者で、リーダー的存在のダイスケだ。

「あー。ごめんごめん。」

「もしかして、遅れた理由ってあれ。」

「そう、そのあれ。」

いつも、オレのことをお見通しのミナ。

「また、妹とケンカしたの。」

「うん、そうなんだ。」

こっちは、とっても秀才で、おとなしい性格のサキ。

「あーあ。あいつのせいで遅れたじゃねーかよ。はあ……。」

「だ・け・ど、言い訳はなし。遅刻は遅刻だ。」

ダイスケが大きな声で横から言ってきた。

「え、え〜。」

「というわけで……、遅刻した罰で、オレ達の夏休みの宿題の数学のプリントやつてもらうからな。」

「え、え〜。……はあ……。」

何か今日、ため息多くないか。オレ達の決まりは、遅刻したらひとつだけ言うことを訊かなければいけないルールがある。

「ほい。」

「はい。」

「はい。」

三人分、自分合わせて四人分の数学のプリントがオレの手のひらにある。とほほ……。

でも、こう見えて、オレ達四人は幼なじみで、大の仲良しなんだ。バンツ

「な、なんだよ。」

いてて。ダイスケがオレの頭を叩いた。

「なあ、ハルト。おまえ、レポートやる？」

「え、ああ。オレはやるよ。内申上がるから。」

「相変わらず、まじめだね。じゃあ、オレもやるのかな。」

「やった方が良いんじゃない？」

そして、ミナが、

「で、テーマは決まった？」

「今、悩んでいる……。」

オレ達が今悩んでいるレポートのテーマは「自由」で何やってもいいから余計に悩む。するとサキが、

「じゃあ、今、学校でもインターネットでも噂になっている『七不思議ゲーム』ってのはどう？」

サキのその言葉に辺りが静かになった。間が長い。オレはゴクリと、つばを飲み込んだ。

「サ、サキ。じよ、冗談はやめてよね。」

ミナがびくびくしながら言った。オレはサキに、

「そ、そうだよ。冗談はやめろよ。ダイスケも何か言いなよ。冗談はやめなつて。」

「……。」

「ダ、ダイスケ……？」

「……。」

ダイスケは黙ったままだ。

「い、一応サキ、それはやめよう……。」

サキは、

「自分たちで七不思議全部見つけて、それをレポートにまとめたらいいんじゃない？簡単でしょ。」

「そ、それはそうだけど……。やっぱりやめよう。なつ。」

「そうだよ。」

と、オレとミナが反対する。二人が反対する理由はある。それは……ガバツ

いきなりダイスケがオレの肩に腕をのせる。

「いいね。いいね。」

「は？」

「やろう！面白そうだな。オレ達で七不思議調べようぜ。」

「えっ！」

オレとミナが一緒に叫んだ。

「ちよつ、ちよつと待ってよ。七不思議ゲームってどんなのか分かる？」

ミナが慌てて言う。慌てるのも無理はない。

その、『七不思議ゲーム』というのは裏ではこうよばれている。
「闇のゲーム」と……。

今から、約十六年ほど前から流行っているゲームだ。みんなが思う、テレビゲームなどの普通のゲームとは違う。自分たちで動き、知識を使いながら、変な現象が起こる場所を探すというゲームだ。そして、その場所全部見つけたら、何か一つだけ願いが叶うというのだ。まさか、こんなばかばかしいゲームが実在するとは誰も思わないだろう。だから、二年前、インチキを見破ろうとしたオレの叔父は、そのゲームに参加した。もう、それっきり叔父は見えていない。こんな感じで今も、行方不明者が続出してるとのことだ……。

ダイスケが、

「当たり前だよ。分かるよ。そんなこと。学校言ってもインターネット見て、ニュース見ても、その話ばっかだから。」

「だったら……。やっぱりやめようよ。」

ミナはずっと反対している。するとサキが、

「去年も一昨年の夏休みみて、同じ事の繰り返しでつまんないよ。今年はスリルがあつたほうがいいでしょ。」

なんだかオレはサキがなぜだか、頼もしく見えた。

「そうだよ。そうだよ。四人で行けばどーってことないって！それに……クリアすると一つだけ何でも願いが叶うんだぜ。レポートも終わって、願いも叶うなんて一石二鳥だと思わないか！？なっ。」

「そ、そりゃあそうだけど……。」

オレは一瞬迷った。やるか、やらないか……。

「で、でも長い間家を開けとくのはやばくない？こう見えてもオレら高二なんなんだし……。」

サキが、

「友達の家泊まり行くって言えば良いだけの話でしょ。」

「あー、そっか。」

オレとダイスケはサキの言葉に納得した。

「よしっ！行くか！」

と、ダイスケ

「そうだな。」

「そうだね。」

と、オレとサキ

「ちょ、ちよつと待ってよ何三人で決めてるの！私は絶対に行かないからね！絶対に！三人とも後悔しても知らないからね！」

「じゃ、ミナはお留守番だ。」

「私たちは夏休みの間スリルを楽しんでおくよ。」

「もういい。じゃつ、今度会うときは生きて会えたらね。」

ミナは怒って、家に帰っていった。

「どうする？帰ったけど。やっぱりやめておく？」

オレは迷った。

「私が後で電話しておくよ。」

「それより、出発は明日なっ！」

と、ダイスケ

「え！明日！」

「そうだ早く言って早く帰ってきた方がいいだろ？」

「そうね。レポートのまとめる時間も考えないとね。」

「っていうことで、明日必要なものを持ってオレの家に、朝七時集合な！ノートと筆記用具忘れるなよ。」

やっぱりダイスケはしっかり者だ。

「なんだか三人で旅行に行くみたいだね。」

「ミナも一緒に行きたかったな……。」

オレは半分楽しくて半分悲しい気持ちになった。

「それと七不思議ゲームのことは絶対に親には言わないこと分かったな。」

「じゃ、私は明日の準備するから帰るね。ばいばい。」

「オレも。じゃあなハルト。」

「ああ。」

オレは二人に手を振った。さて、家帰って準備するか！明日、アミ

に知らされずに気をつけなきゃな。

4

「ただいま。」

「お帰りなさい。あら、早いわねハルト。どうしたの?」

「母さん。ちよつと話が。」

「ん?」

オレと母は食卓に腰掛けた。

「絶対にアミには言わないでちょうだい。母さん。」

「内容によるわね。」

「明日、ダイスケと友達の家に泊まりに行くから。いい?」

「うん。それはお父さんに聞かないと分からないな。でも、お母さんは良いわよ。夏休みくらい友達といたいからね。」

母は笑って答えた。

「ありがとう。それと、アミには絶対に言わないでくれ。お願いします。」

「どうしよつかな。」

「お願いします。」

オレは必死になった。

「分かったわ。でも、今日の夕飯の食器洗い頼んだわよ。」

「ありがとうございます。」

良かった。

「明日何時に出るの?」

「七時までにダイスケの家に行く。」

「そう、起きれるかしら?」

母はにやけている。

「起きれるよっ!」

「気をつけてね。携帯はもって行きなさいよ。」

「うん。」

「楽しみなさいよ。」

「うん。……っていつても、その前に父さんに許可もらわないとね。」

「そうね。」

オレはひとまず安心した。

5

八時になった。

「まっ。こんなもんだろう。明日楽しみだな。っていつても怖いゲームに参加するけど……。」

ガチャッ

「ただいま。」

父が帰ってきた。あれ？珍しいこんなに早く帰ってくるなんて。そうそう、その前に、オレは階段を下りた。

「お帰りなさい、父さん。今日は早いね。」

「ああ、今日は早く終わったんだ。」

すると、母が、

「あなた、ハルトがあなたに話があるんですって。」

「なんだ、ハルト。」

「ええ……と……実は……」

オレは母さんに話したことを全部言った。

「そうか、いいぞ。」

「……えっ、そんなあつさり！」

「だって、ハルトも、もう高二だろ。楽しめよ。」

「あ、うん。」

良かった。父が笑いながら、

「いなくなるなよ。」

「？う、うん。」

「さて、飯だ。ハルト、アミを呼んできなさい。」

「うん。」

そして、夕ご飯を食べて、母との約束の食器洗いを済ませた。すると、アミが

「お兄ちゃん。良いことあった？食器洗いするなんて珍しいね。何か隠し事していない？」

ドキッするどいつ！

「何もないよ。」

「うん。」

「ささ、寝よ！あー眠い、じゃおやすみ。」

「おやすみなさい。」

朝

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

六時にセットしていた目覚ましが鳴った。

「よしっ、起きるか。」

久しぶりに朝にすつきり起きた。

「おはよう。」

「おはよう。珍しく一人で早く起きたわね。」

相変わらず、お母さんは起きるのが早い。

「父さんは？」

「仕事よ。」

「やっぱり。」

「アミは？」

「寝てる。」

母さんは笑いながら言った。

「よっしゃ。」

そして、朝ご飯を食べた。

六時四十分になった。オレは、八分で着替えて、荷物を持ち、玄関へ出た。

「じゃっ！言ってきます。」

「いつてらっしゃい。」

母は微笑んで手を振った。そして、おれは、家を後にした。

十分後

ぎりぎりセーフ。腕時計を見ると残り二分だった。

ピンポン

「おっ、今日は遅れなかったな。」

「おはよう。サキは？」

「おはよう。」

サキが来た。

「おう。おはよう。」

と、ダイスケ。

「母さん行つて来る。」

「ダイスケ。気をつけなさいよ。人様には迷惑かけるんじゃないよつ。」

ダイスケのお母さんは優しいけどオレはちょっと怖い……。

「おうっ！行こう。」

「待ってっ！私も行く！」

「！」

「ミナっ！」

ミナが走ってくる。

「ハアハア、わ、私も一緒に行く！」

息を切らしている。

「サキから電話で聞いた後、考えたんだけどせっかくの四人での夏休みだから一緒に行かないと、思ってた……。」

「そうだな、四人でオレ達だ！全員集合だな。」

ダイスケが笑いながら言った。

「でも、いつもの分かるよな。遅刻したら罰だつて言うこと。」

「そうだね。じゃあ……、私たちと一緒に七不思議ゲームに参加すること。」

サキが笑顔で言った。ミナは、

「うんっ！」

「よし、行こう。」

とオレが言った。

「……どこからが七不思議ゲームの始まり？」

ミナが言ってきた。

「知らん。」

「知らない。」

「私も、知らない。」

四人は黙った。オレ達は無計画に行こうって言ったオレ達に笑った。すると、サキが

「私の叔父さんになぜか、七不思議ゲームについて詳しい人がいるよ。その家に行って聞こう。」

「そうだな。まずは聞き込み調査からだな。」

ダイスケとオレ達は大きな鞆を持ってサキの叔父さんの家に行った。

7

「叔父さーん。サキだけどー。いるー？」

サキが叔父さんの家の玄関の前で大きな声を呼んだ。そうしたら、ガチャツと、ドアが開いた。

「ん？おー、サキじゃないか！久しぶりだな。おつ、友達も一緒か。朝早くどうした、みんなで大きな鞆持ってどうした？」

家から出てきたのは、五十代〜六十代位のサキの叔父さんが出てきた。

「おはようございます。朝早くすみません。お尋ねしたいことがあって来ました。少しお時間良いですか？」

ダイスケが丁重に言った。

「ん？そうなのかいサキ？」

「うん。」

「それより、外は日射病になりやすい。中に入りなさい。」

「おじゃまします。」

叔父さんの家は古風な感じがする。広いリビングのいすに座る。ふかふかして気持ちがいい。ミナが棚の上の女の人が写った写真を見つけた。

「この人は奥さんですか？おきれいですね。」

「そうだよ。だけど二年前に亡くなったよ。」

「あ、すいません。」

ミナはシヨボンとした。

「いいさ、それより聞きたいことは？」

すると、サキが、

「夏休みの宿題のレポートをまとめるために七不思議ゲームのことを調査しようと思ったの。叔父さんとても詳しいから聞きに来たの。一番最初の七不思議って何？」

叔父さんの顔が青ざめた。

「それは本気で言っているのかい？」

「？はい。」

周りの空気が重く感じた。

「やめておきなさい。あのゲームに一度でも足を踏み入れるとクリアするまで二度と戻れない。」

そんな叔父さんにダイスケは、

「ちよつと、冗談はやめてください。もしそうだとっても何故あなたは知っているんですか？」

「……。」

ダイスケの質問に叔父さんとの会話に間が出来た。すると、叔父さんは立ち上がり、奥さんの写真が置いている棚の側に行った。

「実は……私の家内は二年前に亡くなったんじゃない。その七不思議ゲームに足を踏み入れ行方不明になったままなんだ。行方不明になった親友を探しにね……。」

「え……。」

オレ達は言葉を失った。何て言えばいいのか……。

「そしたら、私の友人がゲームに参加して探してくると言って、そ

のまま、その友人も行方不明になった。でも、二週間ぐらいでその友人がそのゲームをクリアして戻ってきた。……だがそこには家内の姿はなかった。友人は探せなかったと言っていた。それから私と友人は、友人のその中での出来事をまとめながら七不思議ゲームの研究をした。そして、分からなかったことが分かった。」

叔父さんの話を聞いていると、不安になってきた。七不思議ゲームに参加するか、参加しないか……。

「オレ、行くのやめておこうかな。」

「何言ってるんだよ！男だろ。」

落ち込んでいるオレにダイスケが怒ってきた。

「オレ達が一度決めたことは諦めたらだめだ。」

「で、でも。」

「大丈夫。四人で行けば何とかなるよ。」

とミナがオレに言う。そんなオレ達に叔父さんは、

「はは、こんな体験談を話しても後ろ目足りない君たちはすごいね。だめだつと言っても聞かなさそうだ。では、どんな現象が現れるのかは話せないけど、七不思議ゲームに参加できる七不思議の一つ目の場所を教えよう……。」

ゴクリつと緊張がはしった。

「それは……、世界中どこにでもある廃墟となったビルの屋上……。」

第二章 仲間

1

「廃墟になったビルの屋上？」

意味が分からなかった。まさか、オレ達のすぐ近くに七不思議ゲームの入り口があったなんて……。

「ああ、そうだ。廃墟となったビルは世界中どこにでもあるよね？
つていうことは、世界のどこからでも参加が出来ると言つことだ。」

「……つていうことは、世界中で行方不明者がいるつて事？叔父さん。」

「さすがサキだね。そうだ、このゲームに参加して犠牲になった人が大勢いるんだ。」

オレ達はゾツとした。体全身に鳥肌が立った。

「でも何故、どんな現象が現れるのかは教えてくれないんですか？
ミナが叔父さんに質問した。

「実は私も知らないんだ。だが、もし知っていたとしても、ゲームにはルールがある。場所がいいが、現象のことについてはルール違反になる。口を滑らせそのことを言うと、その先には恐ろしいものがあるらしい。その恐ろしいことも友人は教えてくれなかったが……。つていつても答えを教えられるやつはこの世で4人しかいないけどね。その友人はこの七不思議ゲームをクリアできた四人の中の一人だったんだ。」

「その友人つて人はすごい人だったんですね。」
叔父さんは微笑んだ。

「よしっ。」

ダイスケがいきなり立った。

「おまえら行くぞっ。なんだか、この話聞いて面白くなってきた。
早く言つて早く帰ろうぜ。」

「そうね。四人もクリアした人がいるって事は私たちが出来ないことではないからね。」

サキが目を輝かして言った。

「幸運を祈るよ。そして、もし家内を見つけたら連れ戻してくれないか？」

「分かりました。」

そして、オレ達は叔父さんの家を後にした。そして、叔父さんに教えてもらった廃墟になったビルへと向かった。

2

「ここだな。やっぱりここはいつ見ても不気味だ。」

オレ達は廃墟になったビルの前で立ち止まり改めて思った。

「でも、四人一緒だから大丈夫だよ。」

と、ミナ。

「さてっ、行くか。心の準備は良いか？まずは、屋上へ行こう。不良どもには気をつけよう。」

そういえば、不良がいたことを忘れていた。見つからないように行かないとな。

「お兄ちゃん。」

？なんだか聞き慣れた声が後ろから聞こえたが……。後ろを振り返ってみると……。アミだ……。

「おまえどうしてここにいる。それに大きな鞆持っで。」

アミはニタニタ笑っている。

「昨日のお兄ちゃんとお母さんの話聞いちゃった。友達の家泊まりに行くんじゃないの？」

げっ！昨日の話聞かれてたのか！ダイスケとミナ、サキがオレを睨んでいる。

「ねえ。お兄ちゃん。七不思議ゲームに参加するんでしょ。だってらアミも行く！」

「はあ。おまえ何言っている。だめだっ！」

「そうだよ。だめだよ。アミちゃんはまだ小学生なのに危険だよ。」
とサキがアミを止めた。でもアミは、

「アミも行くっ。連れて行かないとお母さんに全部このことを言うからね。」

「なっ。でも、母さんには何て言う。アミがいなくなったら。母さん困るだろ！」

「お兄ちゃんと一緒に行きますって紙に書いたもんね。」

「こんの。どうするダイスケ。」

ダイスケは困った顔をしている。

「親にこの事ばれるのはごめんだな。仕方ないアミちゃんも連れて行くか。」

アミはすっごい喜んでいる。はあ。お荷物が増えた。これから大丈夫なのか心配になってきた。

「でも、アミちゃんお約束があるよ。」

ミナがアミに言った。

「絶対に勝手な行動や、はぐれたらだめだよ。このゲームは危険だから。」

アミは、

「はい。」

といって黙った。

「よしっ。一人増えたけど行くぞ。」

と、ダイスケが廃墟のビルに足を踏み入れた。それに続いてオレ達も足を踏み入れた。

3

廃墟になったビルの中はひび割れが多い。明かりがあまり入ってこないため中は暗く、不気味な空気が漂っている。蜘蛛の巣が天井には多く見られる。そして、あちら

こちらからカサカサっていい動物

や虫が動いている音がする。床には、不良達が飲み食いした後の弁当箱や空き缶が捨てられている。

「このビルは確か四回だったはずだ。こんな気味悪いところ早く出ようぜ。」

ダイスケは結構どうとされているが、サキとミナはくつついて歩いている。アミはなぜだか怖がっていない。興味津々に楽しんでいる。

ワハハハハ　ワハハハハ

奥から人の笑い声がする。不良だ。声がオレ達の方に近付いてくる。

「隠れろっ！」

ダイスケがオレ達に指示をした。オレ達は、階段の隣の壁に隠れた。オレと、ダイスケがのぞいてみると、そこには身長百八十センチぐらいの不良が四人いた。耳にはピアスをしており指や首には大量のアクセサリーを付けていた。

「やばいな。あれは力負けする。別の場所から行こう。」

「ああ、そうだな。」

カランカラン

空き缶が転がる音がした。後ろを見るとアミが踏んでしまったらしい。不良達が、その音に気付きオレ達に近付いてくる。

「だれだっ！」

不良達が走ってきた。

「逃げよう！」

ダイスケがオレ達に言い、みんな全速力で走った。

「待てっ！」

後ろから不良が追いかけてくる。必死に走った。

ドタッ

アミがつまづいた。やばい。後ろから不良達が走ってくる。オレは

立ち止まり、

「大丈夫か？」

アミは泣きそうな顔をしているが、我慢して立ち上がった。

「ハルト、速く！」

サキとミナが走りながら言う。すると、アミが、

「大丈夫。」

今にも泣きそうな顔をしている。

「さ、行こう。」

そして、走った。これまでにない速さで！

ドンッ

「？」

何かにぶつかった。見てみると、ダイスケの背中にぶつかった。横を見てみると、サキとミナが立ち止まっている。どうしたのだろうと前を見てみると……不良が五人ほどいた。後ろからは三人の不良達が来た。するとダイスケが左の方にあった階段に向かって走った。それにつられ、オレ達も走った。すると、

「まちやがれー！」

不良達が追いかけてきた。オレ達は階段を上った。息を切らせて脇腹が痛い。汗が額から流れてくる。

バンッ

屋上に着いた。不良達も俺たちに続いて後ろから追いかけてきた。

「ガキ、ただぢやすまねーぞ。手こずらせやがって。」

「くっ。追いつめられた。」

ダイスケが息を切らせながら不良達を睨む。不良達もオレ達も息を切らせた。

「それより、サキの叔父さん屋上って言うていたよな。何も無いじゃないかよ。」

「どうする？オレ達このままじゃつかまってしまふぞ。ダイスケ。オレとダイスケの後ろではサキとミナそしてアミが震えている。前には不良が八人。今のオレ達には勝てっこない。どうする。どうす

れば……。オレは思った。やっぱり来るんじゃないかった。こんな危険なことになるなら、七不思議なんかに関わらなければ良かったと……。でも、過去の事を嘆いても何も変わらない。オレはどうなっても良いからダイスケ、サキ、ミナ、アミみんな助かってくれ……。

「やっちまえー。」

不良達が俺たちに拳をあげておそつてくる。もうだめだっ！そう思い目を閉じた。

「？」

攻撃が来ない。どうしたんだ？そう思い目をおそろおそろ開けてみた。不良達は顔が青ざめて止まっている。

「？」

不良達の目を見ると、俺たちの後ろにあるものに青ざめているらしい。ダイスケの方を見ると、ダイスケも後ろを見て青ざめている。何だっ！オレは後ろを向いた。

「！」

それは、これからオレ達が参加する七不思議ゲームの入り口。長く長く天に続く「白い階段」が……。

4

「な、なんだこれ」

言葉にならない。恐怖と美しさが半々の階段だった。

「う、うわー。」

さっきまでなかった階段に驚き不良達は逃げて行った。今の時間は昼間でもあるのに白い階段の周りは暗く、夜のような雰囲気でした。もしかしたら、これが七不思議ゲームの入り口？

ダイスケが目を丸くして言う。

「多分そうかも。……きれい……。」
とサキ。

「みんな、どうする？行く？」

そう、ミナが言うとオレ達は黙った。するとアミが、
「行くー。行くー。」

アミの一言でオレは笑った。

「そうだな。行こう！ここまで来たんだ。」

その言葉にダイスケ、サキ、ミナが首を縦に振った。

「行こう！」

「だが、その前に……。みんなで約束な。絶対にみんなでクリアして一緒に帰ること。分かったな！」

そのダイスケの言葉に、

「ああ。」

「うん。」

「うん。」

「はい。」

「よろしい！」

そして、オレ達は「白い階段」の段を一步一步と上って行った。

興味の心と恐怖の心を二つ抱え、五感を奮い上げながら未知の場所へと……。

5

「なあ、ハルト。この階段、いくら何でも長すぎないか？」

ダイスケが息を切らせながら言う。確かにそうだ。長い、長すぎる。

「す、少し休憩しないか。さすがのオレでも疲れた。」

「そうだな。サキやミナはともかく、アミちゃんが倒れそうだな。」

そして、オレ達は階段の途中で腰掛けた。

「ねえ、ハルト。私達、もう1時間くらいは階段登っているよね？」

サキが困った顔をして言う。

「地上はとっくに見えなくなっただけ、先も見えないなんて、降りるのも登るのも大変だよー。」

ミナは頭を抱える。アミは、疲れて話しすらない。

「でも、階段があるって事はその先があるって言うことだ。後、もう少し頑張ろう。」

ダイスケが立ち上がり、階段を先、登り始めた。続いて、ミナ、サキも登り始めた。

「アミ、大丈夫か？」

アミから返事がない。

「置いて行かれるぞ。」

そう言うときアミは首を横にフルフルと振る。

「でも、登らないと置いて行かれるぞ。」

するとアミが小声で、

「アミ、これくらいどうって事ない。」

「そうか、じゃ行くぞ。つらいときは兄ちゃんに言うんだぞ。」

「うん。」

アミはそう言い、オレとアミは登り始めた。

「はっ、はっ、はっ、ふー」

また、呼吸が荒くなってきた。今、ダイスケと、オレの距離は離れている。

「おーい、ダイスケ。階段の先は見えてきた？」

オレの言葉にダイスケは振り向いた。すると、

「ハルト！走れ！」

「？」

ダイスケの顔が赤から青ざめている。続いてサキとミナも……。

バキッ……バキバキ……バキ……

「ハルト！後ろー！」

バツ！階段が崩れて来ている！

「アミっ！走るぞっ！」

オレはアミの手を取り、階段を全速力で上った。後ろから異様な音が近づいてくる。ダイスケ達も走っている。

「！」

いきなりダイスケが後ろに振り向いた。

「扉が見えたぞー。急げー。」

「よしっ。アミ、もう一息だ。頑張るぞ。」

「うん。」

オレもアミも他のみんなも息をゼイゼイさせながら全速力で走った！
ガンッ！

アミが段差につまづいた。オレは立ち止まり、

「大丈夫か？」

後ろからバキ……バキ……と、ひび割れが近付いてくる。

「アミちゃん！速く！」

バキ……バキ……もう、駄目だっ！……

ドンッ

「？」

オレとアミの目の前でひび割れが止まり、ひびが入った階段が下に落ちた。

「た、助かった……。」「

「ハルト！アミちゃん！大丈夫か？」

ダイスケ達が近付いてくる。

「ふー。死ぬかと思った。」

オレは目を丸くして息を吐いた。アミは泣きそうな顔をしている。

「もう大丈夫だぞ、アミ。」

「そうだよ。それに後もうちょっとでこの長い階段とはおさらばだよ。さ、頑張ろう。」

サキがアミに手を取り、みんなで扉に向かった。

6

オレ達四人は扉の前で呆然としていた。

「七不思議って、すべてがあり得ない。さすがに、この扉はでかすぎるだろうー。」

その扉は真っ白く綺麗な彫刻が入っていてとても美しく、高さが約二十メートルはある。この、扉の向こうがオレ達が目指している

七不思議ゲームの世界……。そう思うとわくわくしてたまらないみんなもそうだろう。その時のオレ達はいったいどんなものが待ちかまえているのか不安というのがあまりなかった。

「開けるぞ。」

ダイスケのその言葉に右の扉にミナとダイスケ、左の扉にオレとサキとミナが同時に押した。すると、少しずつ少しずつガガ、ガガ、と、開いていった。……………

「え…………？」

扉の中に扉？それも開けた扉よりも少し小さい。そして、その少し小さい扉も開けた。

「ええ…………また！」

次はオレの膝くらいの小さい扉が出てきた。

「…………。」

みんな黙ったままアミが扉を開け。一人ずつくぐった。

「これも開ける？ハルト。」

ミナが失笑している。そこにはとてつもなく大きな扉があった。

「さすがにこれは開けられないよ。」

「一応押してみようぜ。」

そしてオレ達は歯を食いしばり思いっきり押した。

「駄目だ。びくりともしない。」

困った、どうしよう。これじゃは進めない。

みんなの周りに諦めの雰囲気が漂った。

ぷっ。

「！？」

扉の隣で微かな笑い声が聞こえた。

「何でみんなそんな開け方をするんだろう。」

隣で小学校四年生ぐらいの男の子が笑っていた。

「誰！？」

男の子はオレ達に近付いて言った。

「ボクはユウ。お兄ちゃん達は？」

みんな啞然としている。

サキがユウという男の子に質問した。

「あれ？ってことは、私達以外にもここに来ているってこと？」

「うん、そうだよ。」

やっぱりここは七不思議ゲームの入り口だったんだ。

「ねえ。この扉はどうやって開けるの？」

ミナが不思議に思いながら言う。

「その扉は開けても開けても出てくる扉だよ。でも、その扉を開けるには方法が一つあるよ。」

「開けるには……？」

いったいどうやればいいのか耳を傾けた。鍵を使うのかな？それとも入り口は本当は別の場所にあるのかな？オレは早く知りたくて焦らした。

「押すんじゃないくて、引くんだよ。」

「……は？」

「だから、引けばいいの。」

「……。そんな簡単なこと！？」

「うん。何故かここに来る人ほとんど押すから最初はびっくりしたよ。引くって言う考えはないのかな？」

「プツ。……アハハハハ。」

「そんなことだったんだ。」

オレ達は思わず笑った。

「でも、こんな大きな扉引いても開けられないんじゃない？」

「それは大丈夫。引くのは簡単だから。」

また、みんなで再び笑った。

「教えてくれてありがとう。ユウ。オレはハルト。そして、こっちにいるのが友達と妹のアミ。よろしく。」

「ダイスケだ。」

「ミナです。」

「サキです。」

するとユウは、

「よろしく。お兄ちゃん達も、『七不思議ゲーム』に参加しに来たの?」

「うん。そうだよ。ところでユウくんはなんでここにいるの?」

「それは……」

ユウは言葉を詰まらせた。そういえばなぜ中学生にもなっていない小学生が、こんなオレ達でも不気味といえる場所で一人でいるのが不思議だった。何か事情があるのだろうか?

「お母さん……」

「え……?」

「お母さんを待っているの。」

「ユウのお母さんもこれに参加しているか!?」

オレはユウの肩をつかんで言った。

「うん。ここに来る前にボクのお父さんが亡くなつたんだ。それでお母さんが朝から晩までずっとずっと泣いていたんだ。そしてボクがたまたま見たインターネットの掲示板に『七不思議ゲーム』をクリアすると何でも願いが叶うって書いてあったから、お父さんを生き返らせるためにボクとお母さんでここに来たんだ。でも、お兄ちゃん達も体験したよね。階段が崩れるのを……。それでお母さんが危険と判断したのかここで待って起きなさいって。絶対に迎えに来るからって。それからずっとボクはお母さんを待っているんだ。」

「……………」

オレはこの子にかけける言葉をいくら頭の中から探しても出てこなかった。するとサキが

「ねえユウ……くん。お姉ちゃん達とお母さんを探しに行かない?」

「え……」

「ちょ……何言つてんだよ、サキ!」

「ユウくん……このゲームはね世界中で行方不明者を出している危険ゲームなの。もしかしたらあなたのお母さんも……」

「おいつサキ!」

オレはサキの無責任の言葉に怒りがこみ上げてきた。

「だってハルト、ユウくんのお母さんがもし行方不明だったら、いつ迎えに来るか分からないんだよ。だったら一緒に行って探した方がいいよ。」

「でも……」

「……ボクも……、ボクも連れてって！」

「！」

「このままお母さんを待つのは嫌だっ！自分でお母さんを探しに行く！」

「ユウ……。でもこの中は危険がいっぱいなんだよ。」

「分かってる。それでもいいんだ！」

「よし！話はついたということで、行きますか！」

「ダイスケ……」

「ほらっさつさと行くぞ！ハルト。そしてユウ。」

「うん。」

そしてまた『七不思議ゲーム』に参加する仲間が増えた。ハルト、ダイスケ、サキ、ミナ、アミ、そしてユウ。オレ達は、ただレポートのためだけに来ただけだ。なのに人数が増えサキの叔父さんの奥さん、そして、ユウのお母さんを捜すことになった。そして、オレ達は扉の前にたち、思いつき扉を引いた。その時オレの背中には責任と不安という重荷がのしかかっていた。そして六人は扉の中に足を踏み入れた。一步一步と……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7358u/>

八不思議

2011年10月9日10時19分発行